

比婆郡遺族会

西城遺族会

婦人部・青壮年部設立（昭和三十年頃）

現在 婦人部長 是田 ヒサミ 青壮年部長 難波 茂利

■年中行事の概要

英霊顕彰について

1 追悼式、慰霊祭等 年二回

主催者は遺族会

2 護国団参、広島護国神社参拝 春秋二回

3 遺族会研修行事 役員総会、婦人部集会

4 その他

遺族会内の忠魂碑等の数 三

護国神社（独立） 一

八幡遺族会

婦人部・青壮年部設立（昭和三十年頃）

現在 婦人部長 小林 シゲ子

■年中行事の概要

英霊顕彰について

遺族会内の忠魂碑等の数 一、外に八幡遺族会慰霊碑 一

田森遺族会

婦人部・青壮年部の設立（昭和三十年頃）

現在 婦人部長 田中 睦子

■年中行事の概要

英霊顕彰について

1 追悼式、慰霊祭等 年一回

主催者は東城町連合遺族会

2 靖国団参、広島護国神社参拝

東城遺族会

婦人部・青壮年部の設立（昭和三十年頃）

現在 婦人部長 宮永 百白子

■年中行事の概要

英霊顕彰について

1 追悼式、慰霊祭等 年一回

主催者は東城町遺族連合会

新坂遺族会

婦人部・青壮年部の設立（昭和三十年頃）

現在 婦人部長 横山 フミ

■年中行事の概要

英霊顕彰について

1 追悼式、東城町慰霊祭等 年一回

主催者は東城町遺族連合会

比和遺族会

婦人部・青壮年部の設立（昭和三十年頃）

現在 婦人部長 三谿 タカヨ 青壮年部長 木原 正雄

■年中行事の概要

英霊顕彰について

1 追悼式、慰霊祭等 年一回（神式、仏式交互に行う）

主催者は比和町遺族会

2 靖国団参

一、広島護国神社参拝

一、福山備後護国神社参拝

3 遺族会研修行事

一、比婆郡遺族会婦人部、青年部研修

一、役員、理事、婦人部、青年部等にて遺族会の運営

其の他将来について協議会の実施

4 其の他

遺族会内の忠魂碑等の数 比和山八幡神社に忠魂碑一

招魂社、護国神社（比和町大字三河内、二社共独立社である）

口和遺族会

婦人部・青壮年部の設立（昭和三十年頃）

現在 婦人部長 永戸 松子 青壮年部長 糸原 洋次

■年中行事の概要

英霊顕彰について

1 追悼式、慰霊祭等 三年一回

主催者は口和町奉賛会

2 靖国団参、広島護国神社参拝

高野遺族会

婦人部・青壮年部の設立（昭和三十年頃）

現在 婦人部長 中村 ヤスエ 青壮年部長 林 繁実

■年中行事の概要

英霊顕彰について

1 追悼式、慰霊祭等四年一回

主催者は遺族会

2 靖国団参 無、広島護国神社参拝 年一回

3 遺族会研修行事、忠魂碑清掃参拝 年一回

4 其の他

遺族会内の忠魂碑等の数 三

■比婆郡遺族会現況

計	高野	口和	比和	久代	帝釈	新坂	東城	田森	八幡	小奴可	西城	遺族会 区分	
												柱英 数霊	遺族 数
	二〇七	二七九	二三七				二〇二	九八			四三〇		
	一四二	一六一	二三七			五	一七七	九三	一二		二八九		
	一五	一五	一四			二	三〇				四三		部婦 数人
	二一	一四	一四								三七		部青 数壯 数年
二〇四	二二	一八	二五	三	一〇	四	三二	一四	一二	九	五五		員県 数会
	二、八〇〇	二、〇〇〇	四、〇〇〇			三、〇〇〇	一、五〇〇	二、〇〇〇			一、七〇〇円	正会 員	会 費
	五〇〇	五〇〇	一、五〇〇								二〇〇円	準会 員	
	三五、〇〇〇	五〇、〇〇〇	一〇三、〇〇〇				一八〇、〇〇〇	なし	なし		二〇六、〇〇〇円		町補 助
	四年に 一回	三年に 一回	一回			一回	一回	年一回	年一回		春秋二回		慰霊 祭
	一		一					参拝			春秋二回		参護 国神 社 島
	三		一				一	一	一		三		忠魂 碑
			二								護国神社一		招魂 社

永かった苦難の道のり

比婆郡婦人部長 中 林 ヤスエ

まっしぐらに生きて来た道、後を振り返って見れば気の遠くなる様な細い細い曲りくねった道でした。私の生涯は僅か一年八ヶ月の結婚生活でした。これに終止符を打ったのは、御国の為と言う一枚の赤紙でした。昭和十二年七月七日日中戦争が始った当時は私は庄原実業で寄宿舎生活でした。緊張仕切った当時は生徒も朝は兵士の武運長久祈願、或いは出征兵士の見送り、夜は無言で凱旋される遺骨の御出迎、駅前の広場に淋しく鳴り響くラッパの音を合図に下車される若い未亡人が何も解らぬ幼児を連れ、漠然と白木の箱を胸にただ夢遊病者の様な姿で下車されました時、此の世の地獄とは此の事かと身も心も震える思いで友達と御迎え致したものです。此の痛ましい姿が私の身体に降りかかって来ましようとは想像もした事もございませんでした。

夫は支那事变第一回に召集されて、四年半と言う長期間の勤務を終了して帰って居りましたので最早召集はあるまいからと、無性に進められ昭和十六年五月五日結婚致しました。それも束の間、同年十月七日再度応召され、広島陸軍病院気付、伊藤部隊に入隊、直ちに比島へ出港させられました。それから明暮れ安否を気遣う毎日でしたが、運良く昭和十八年十二月三十日無事帰って参りました。其の時の喜びは口にする事も筆で記す事も出来ません。ただ無我夢中で跣足で雪の中を走りました。家族揃って始めて迎える正月は格別でございました。私共は一年間の農作業の計画も立て、家の事、又御遺族の農作業の手伝い、兎に角二人で

働く事の喜びを身体に受け幸福感に浸る毎日でした。しかし乍ら戦争は以前にも増して厳しくなり昭和十九年十月十五日三回目の召集令状はささず当役場より届けられました。私は当時七カ月の胎児を宿しておりましたので、いかに御国の為とは云え全身はしびれ口を聞く事も出来ず只々泣き明かす毎日でしたが、不幸中の幸にも二週間後に面会が許可され急いで出広し指定された場所に急ぎました。兵舎の軒下では大勢の面会人でごった返し、幼児を見失った人、老父母と行違いになりあせる御家族、新婚三日目と云われる若夫婦は泣き乍ら足の靴づれの手当、又家族を空襲で皆失って面会人がなく愚痴る兵士、検閲無しの手紙を依頼する方、今時の恵まれた世代の者には想像もつきがたい事でございます。私等一家は幸にも隊長の宿を御給え頂き、五時間家族と一緒に過す事が出来ました。其の時窓の外を見ますと、老兵士が次々と宇品港に向っておられるいたましい姿を見送り無事御帰還を祈るのみでございました。此の様な張詰た雰囲気の中、私もめめしく泣いてばかりはおられず安心して戦場に出向く事が出来ます様軍人の妻を發揮したのでございます。別れ際に『何があっても、子供と別れるな』と言葉少く戦地にと出港致しました。私も年の暮三十日に難産ではございましたが男の子を授けました。其の頃より比島の戦いは一層厳しくなり日ごとに玉砕・玉砕と聞かされる様になり不安はつのるばかりでした。私は心の安定を求め、子供の初毛を切って手紙の中に入れて発送致しましたが、受取人不明と帰って来ました。その繰返しの日々がつづきました。そして八月終戦となり一応ホッと致し夫の帰りを待つばかりと安堵致しました。当時私は数えます年二十三才でございましたが、復員なさる旧軍人の御出迎えをし、其の度、今度は夫が明日は此度と夜もねむれず、一寸の物音にも起



き上り待ち続けました。近所の方は殆ど帰還されましたが、一年過ぎて
 も何等音信も無く、私は待ち切れず子供を背負い庄原の旧軍人相談所に
 足を運びました。余りねんごろに明して貰えませんでしたので、二度三
 度と足を運び御叱りも頂戴した者でございます。其の頃私方では義妹家
 族が疎開して同居して居りましたので、お互に生来を案じる毎日でした。
 私は実姉に依頼して県庁の民政部に行き、比島派遣威七一九六部隊の名
 簿を調べました。県内の御方は大竹市 山下寅一様、此の方は比島の地
 図を詳記して上陸以来共に行動した事を送って下さいました。今一人の
 方は旧比婆郡山ノ内西村字下、当時は会津若松市に住んで居られました
 ので御目にかかる事は出来ませんでした。出港以来一緒であったが食
 糧が無くなり四十五人の兵は十七人ずつ別行動になり、馬肉を分け合い
 それぞれが山奥に身をかくしたので残念乍ら最後の様子を知らず事が出
 来ないが、と其の後も度々勇気付けて下さいました。世羅郡神田村下徳
 良 田原恒様も食糧の不足する中比島はゲリラ襲撃におそれ最早生存
 は不可であろうと胸をさされる様な便りを頂きましたが、夫の戦死は信
 じ切れず落ちつかず苦しむ私を見兼ね肉親の者も手分けしてあちこちと
 手がかりは無いかとたずね歩いてくれました。私は無理は承知、舅姑に
 依頼して拝み所をたずね廻りました。最後に岡山県勝田郡に足を運びま
 した。そこには老人そして若い私と同年令位の方々が部屋一杯でした。
 漸く私の番になりましたので前に進みますと、いきなり比島で戦死して
 いる。六月には公報が届くとズバリ一言、私は聞くや聞かずで目の前が
 真暗になり他人様に変な御迷惑をおかけして帰りました。それから間
 も無く公報と形ばかりの遺骨箱が届けられ、無残な姿に国の無責任なは
 からいに一層淋しさを感じ身を切る思いでした。それからの私は人様の

楽しまれる場所、お盆、お祭、運動会と事ある如私等母子は切なさを感じた者でございます。息子も父親の顔も知らず父親の情にしたった事もなく、ただ机上に常に置いてある軍装の写真にぬかずくばかりでした。

其頃又しても私を苦しめたのが国の定めた新憲法『夫の名義の財産が無い場合は其の配偶者には当家の権利は無い』と云う事が村中に流れ、私方でも何度も親類会議が催される様になりましたので、私は当家にとどまる事は困難な状態となりました。その時当時村会議員の席におられた方が突然に「憲法と言うものは人の情がともなうて始めて法は成立するもの」と親戚一同の前で涙を流し乍ら御助言下さいました御言葉は有難く今もしっかりと胸に残って居ります。何時の世でも強い者への味方は喜ばれますが、弱い者を助けるには余程の勇氣の入る事であつたと今なお感謝致しております。此の憲法に依つて其の頃の二十代三十代の戦争後家は実家に帰される者、家の都合では再婚させられた人、私もいろいろ迷い迷わされましたが、子供と同居丈は赦されました。しかし仲々面倒は見えてやる事も出来兼ね、夜も舅姑の床に子供は連れて行かれ一緒に寝る事もゆるされない日々でした。

泣くな 我が子よ 母あらば

浮世の風は いかにも吹くとも

夜如一人で床につく私は此の文句を繰返しました。度々の親類会議の結果、舅は思い諦め十年間同居した娘には大阪に土地を買い求め家を建て、義妹家族に新しい生活を与えましたので、一応私も安定致しました。

昭和三十八年には息子も庄原実業高校を卒業して帰ってまいりましたが、以前より進学を希望していました。しかし家を出て学ぶと言う事は叶いません、東京農大通信教育を希望し指導者の方の援助もあり四年間

勉強させて頂き無事に終了証書を頂きました。其の時は嬉しく永い間御力添え下さった指導者の方々に感謝致しました。

昭和四十二年には常陸宮同妃両殿下が御来広になり、広島青年センターに於て県内勤労青年十名が選ばれ懇談会が催されましたが、其の時の一員に加えて頂き、妃殿下より肉牛の飼料の与え方等細々とした質問をお受けした事を悦び、一入勇氣付けられ喜んで帰りました。昭和四十三年度よりは実習生（農に生きる青年）をお受けする事を県より依頼され、一仕切三ヶ月間二名の割当、兄弟に恵まれていない一人息子にとつては願ってもない事でしたが、経済的にも精神的にも楽な事ではございませんでした。遠くは五島列島、沖縄、山口、栃木県、言葉も解かり兼ねる生徒を迎えます事は不安もございましたが、まあ共に勉強しようと迎えたのでございます。丁度其の頃嫁も婦人民政委員の座で勉強させて頂いて居りましたので、実習生への面倒見も良く細い事にも気を配り生徒からも親しまれていた様でございます。今頃になつても正月には夫々が名産物を送り電話で『婆ちゃんよ、俺が見に行くけえ、それまで死ぬなよう』と大きな声で元気づけてくれます。本当に人の情のやりとりの有難さ尊さを今なお感じています。

私共戦争未亡人高野地区では子育ても一段落しました頃より頼母子講程度の集いを致しておりました所、あちこちと遺族婦人部が結成されている事を聞き地区会長に援助を願いました処、比婆郡でも婦人部は結成されて中林は副部長になっていたと聞かされ部員に呼びかける様部長にも幾度と無く話しましたが、私如き無学な者では力足りませず部員の呼びかける事も叶いませんでした。昭和六十年部員の希望もあり北部地区丈で集る事になり、場所を比和地区にお願いしましたところ、外ならん

集いだからと心良く承知下さいまして佐々木会長、久光事務局長様には大変な御迷惑をおかけした上にも御寄附まで頂き激励の言葉の数々、部員は百万の味方を得た嬉しさでございました。講師には県青年部長 井沢氏をお願いし初めて集った私共に細々と県遺族会の現状、特に他郡市の婦人部の活躍振り等話して下さいました。平素念願して居りました者同志の集りで意外にも多くの出席者で、藤田会長の御世話で県より助成金を頂く事が出来ました。それから地区で会合し今まで教わった講師の言葉の復習もしました。一番記憶して居ります事は

子育てについて教った言葉に

一ツ子供を叱る権利を持つ母になれ

一ツ子供の養育は五ツ教えて三ツ褒め

二ツたたいて 良い子に育てよ

又或講師は組織の強化につとめよ

愛の深さは ふれ合う肌の

面積に 正比例する

此の御言葉は次の世代嫁連中にも折を見ては話しております。いろいろと学び得ると云う事は必ず家庭の和を持つ事にもつながる事を認識する部員も増え、平成三年又しても比和へ御願いして、比婆五ヶ町の婦人部が初めて一堂に集り又しても佐々木会長、久光事務局長様に以前にも増して限らない御世話になりました。講師は北部の方丈に心安く無理やり御願して井沢部長に御出で頂きました。藤田会長、青年部長にも御足労を依頼して一日を無駄の無い意義ある会に終了する事が出来ました。別れる際は又寄う。又呼んで、良かった良かったの連発。次回の集いを約束して別れを惜しみました。私共は終戦五十年の風雪を耐え抜いた同志

でございます。親よりも姉妹よりも大切な寄りどころのある団体が設けられてあるのでございます。現在の私共は早孫にも手がかからなくなり、家事に煩わされる事も少くなりました。これからは進んで組織活動に参加し、夫々が自分を磨く様努力致しましたら、やがては友達との和を持つ事に相成るものと私は信じて毎日を過ごさせて頂いて居ります。

泣かされし 場合も

あれど やりとげん

幸せ見えて 未はたのもし

私共同志は逢った度如励げまし慰め合い、子育てを生涯の目標として懸命に努力して参りましたが、今では私も若夫婦にたよりにされ三人の孫に囲まれ、毎日を楽ししい我儘な楽しい日々を過ごさせて頂いて居ります。永い間私共を支えて下さいました多くの方々に感謝致しますと共に、今後の遺族会の益々の奮起を待望して止みません。

私の歩み

比和町遺族会婦人部長 三 谿 ながよ

私の主人は兵庫県加古川飛行隊に入隊、のち中支派遣第三九野戦郵便局転属以来中支南支各地に転戦、のち仏印シンガポール総攻撃に参戦、その後病魔にかかり中支にて発病内地送還となり、昭和十八年七月広島陸軍病院に入院、同十九年十二月十六日大野分院より自宅療養のため退院。昭和二十一年三月二十日病氣再発、同二十二年一月十一日死亡、戦病死と認定される。

小学三年生の長女、七才の二女、一才の長男を連れて夫の死を悲しむひまもなく、今日の日を明日からの生活をと途方にわけ暮の毎日でした。

戦が終わって早や五十年、言葉ではただ一言ですが、静かに過ぎ去りし日を振りかえって見ますとき、長い長い年月でもあり、又アツト云う間に過ぎ去ったようにも思われます。夫をなくしたあの日からが、私達にとっては本当の戦いが始つたのだと今つくづく思い出されます。

終戦後の食糧難物資の乏しい中で幼い子を背に、モミジ葉の様な吾が子の手を引き乍ら、この子たちをどうして、ひもじさから、寒さから守ろうかと断崖絶壁に立つ思いで夜も日もともに働きとおしました。

うす暗い電灯のもとで時には愚痴もこぼし、涙を流したことも一度や二度ではありませんでした。

物資の乏しい中、子供を背にミシン糸や筆入れの様なものを売り歩いたものでした。

子供が追い追いに大きくなり手がかからなくなってからは、春は田植、夏は田の草とり、秋は稲刈りと農家の手伝いに、夜は夜半まで針仕事、又家事の手伝いに、魚屋さんの手伝いと、生きるためにいろんな仕事をし身を粉にして働いた気がします。

「子は親の背を見て育つ」との諺があります。背すじをのびして生き抜きました、おかげで子供らもよく手伝ってくれました。他人様の子供さんにくらべて、見る目にもいとおしく可愛想でなりませんでしたが、あのときはどうにも仕方がありませんでした。本当によく努力しついで来てくれました。

今は苦労話も笑い話になり感謝の心が一杯です。私達親子にとって一生の内、あの頃の生活が一番意義のある大切な生活であつたと思われま

す。

戦没軍人の妻と云う社会の目に感じながら、走馬燈の如く五十年という歳月をすごしましたが、今はすっかりと高齢の身となり肩や足腰の痛みを感じる今日この頃です。

今では戦没者公務扶助料という国家の保障も次第に良くなり、福祉の行き届いた現在私達は本当に有難い日々を送らせて頂いて居ります。子供たちも早やよき父となり母となり、孫達もすっかり成長致し、生活はそれぞれですが、社会の一員として立派に平成の世代になって生きて行きつつあります。

子や孫たちのこのような姿をホホエミながら静かに見守ってやれるのも、英霊皆様の尊い犠牲のおかげと深く感謝申し上げます。今後戦没英霊顕彰のために余生を捧げたいと思っております。

英霊の皆様安らかにお鎮り下さいまして、私達遺族一同をお守り下さいますことを念じ筆をおきます。

体 験 記

比和町遺族会壮年部長 木 原 春 雄

二回目の召集令状を受けて出て行つた父、一週間の内地下関の勤務すぐ戦地に向うとの事、母と叔父に連れられて下関に面会に行つた。其の頃は戦争も負けの戦になつていたので逢う事もなかなか出来ない。輸送船の姿を見たのが最後、しばらくして一枚の葉書に無事に着いた、母の言われる事を良く聞いて仲良くするんだと書いて有りました。戦争は

激しく学校に行っても畑や山の開墾作業ばかりです。暑い午前中のサツマ芋の手入れを終り校舎に帰り中食前の事でした。日本帝国について無条件降伏、残念だ我々は生きて居る事は出来ないのだ、皆死ねるか、一同はいと答えた担任の先生の顔が今思い出される。父の戦死の報を受けて勝つ為に我慢して耐えて来た心が一度にくずれてしまった。祖父が病気で休んで居たが、父の戦死でがっくりと力を落して十日余りの日が過ぎた時に急に病気が悪く他界してしまった。祖母と母が二町歩の田を耕作しなくてはならない。現代のように機械化ではなく手を使っての田仕事、田植も全部手植の時代ですで大変でした。農繁期で学校は休みに成り何かと手伝をしなくては成りません。田植と言っても母と私と妹の三人一反の田を植えるのも二日かかりと言ったありさまでした。五人

の弟妹の学校に又保育に仕事と昼夜の別なく大変な苦労だった。一番頼りに思っていた祖母も無理が重って一年過ぎない内に死んでしまい、二年の間に三人の葬儀をして、残ったのは母と十四才を迎えた私と一才の妹までの七人でした。親戚の方の援助と一生懸命にがんばった母、寒い雪の夜いり場でたい松を灯して夕食、当時電燈もなくなりたい松にたよっていた、物音を聞いているは小さく身を寄せ合う、ともすると消えそうになるかがり火、いそいで肥松をくべる。今考えるとうそのようだが、実際に此んな悲しい日々が六ヶ年、やっと二十才になった自分も一人前に人々の中に大人としての仲間入り、でも弟妹の教育に又次々に新しい文化にと取り組んで行かなくてはならなかった。振り返って見ると唯昨日の事のように思われるけれども、終戦五十年を迎えようとする今日の経済世界一か二と言われる発展をとげたのも、一個人ではない日本中いや世界中の一部にこうした時代をささえて来た目に見えない苦勞と努力の積

み重なって築き上げた。平和な日々を我れくは忘れる事なく、犠牲になられた人々に感謝の気持を持って此れからの日本を背負って戴き度いと念じて居ります。